きらめく星座

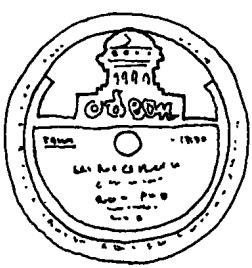
―昭和オデオン堂物語―

井上ひさし

きらめく星座

―昭和オデオン堂物語―

井上ひさし



集英社

きらめく星座
——昭和オデオン堂物語——

一九八五年 九 月一〇日 第一刷印刷
一九八五年 九 月二五日 第一刷発行

著 者 井上ひさし

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
〒一〇一 東京都千代田区一ツ橋二—五—一〇
出版部 (〇三) 二二三八—一八四二
販売部 (〇三) 二二三〇—六一七一
製作課 (〇三) 二二三八—一九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 六八〇円

©H. INOUE, Printed in Japan. 1985

ISBN4-08-772538-3 C0093

著者との了解により検印を廃止いたします。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

目次

第一幕
一　防毒面　7
二　恩賜の煙草　35
三　コーヒー　69
第二幕
四　鶏卵（たまご）　101
五　靴　135
六　麦酒（ビール）　169

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

きらめく星座

――昭和オデオン堂物語――

登場人物

小笠原信吉
その妻・ふじ
長男・正一
長女・みさを
その夫・源次郎

竹田慶介
憲兵伍長権藤三郎
森本忠夫

防共護国団団員甲
〃　乙
電報配達の若者

その友人・魚屋の店員

場所

浅草区西浅草（田島町）オデオン堂レコード店

時

昭和十五年（一九四〇）の秋の深まる頃から翌十六年の冬のはじめまで。

場割

第一幕

一　昭和十五年十一月三日・明治節の夜。現在は文化の日

二　昭和十六年二月十一日・紀元節の夜。現在は建国記念の日

三　〃　四月二十九日・天長節の夜。現在もまた天皇誕生日

第二幕

四　昭和十六年八月十五日・正午近く

五　〃　十一月二十三日・新嘗祭の夜。現在は勤労感謝の日

六　〃　十二月八日の前夜

第一幕

一　防毒面（ぼうどくめん）

どこか遠くで、のんびりと半鐘が鳴つてゐる。「●（カーン）　●●（カンカン）」と、一点（テン）と二点斑打（ハンダ）（連打）の鐘の音、空襲警報解除令である。その鐘の音に誘ひ出されでもしたやうに序曲（オーバーチュア）が湧き上り、それが近づいてくるにつれて場内溶暗。

序曲は、この劇の登場人物たちがこよなく愛した当時の流行歌、それも劇中で用ひられる流行歌のメドレーで、『月光値千金』『燦（きら）めく星座』『愛国の花』『一杯のコーヒーから』『愛馬進軍歌』『小さい喫茶店（キッチャテン）』『チャイナ・タンゴ』『星めぐりの歌』『煙草屋の娘』『青（ブルー）空（ヘブン）』の十曲。

序曲の終り近く、舞台のあちこちに人間の髑髏（されこうべ）とよく似た防毒面が六つ浮びあがる。防毒

面たちの動きは物の怪じみてゐる。ただしそのうちの二つは、動きが極めて乏しい。一つは上手際前面へきてぴたりと動かなくなり、もう一つは中央やや下手寄りでスーツと沈んで止まる。

序曲が柔らかくエンディングを迎へる。と同時に防毒面のだれかが電灯のスイッチをひねり、照明が入る。

そこは浅草近くの裏通りに面したレコード店「オデオン堂」の帳場と茶の間。すなはち、上手が帳場で下手が茶の間。帳場の向ふが店である。帳場と店とを仕切つてゐるのは壁（衝立に近い）と竪型ピアノ。壁の前には大きな電気蓄音機があつてあたりを睥睨してゐる。また壁には灰田勝彦（日本ビクター）と市川春代（日本クリスタル）の大きな宣伝写真が並べて貼つてある。上手際前面に机と木製の丸椅子。そのすぐ上手（或いは手前）に半畳ほどの三和土とガラス戸。このガラス戸からも通りへ出ることができる。茶の間の中央に丸い卓袱台（折り畳み式）。茶の間の正面は大型の日めくりの架かつた壁。日めくりの日付は「十一月三日」になつてゐる。この日は、日曜で祝日。壁の前に茶箪笥。その上に四球受信機。さらにその上方は小さな神棚。なほ、壁の向ふ側はお勝手である。茶の間の壁に向つて右側に二階へ通じる階段が見える。さつき防毒面の一つが宙へ高々と浮び

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

上つたかのやうに見えたが、それはたぶんこの階段を昇り降りしたせゐだらう。壁に向つて左手はお勝手への出入り口。そして下手奥は寝間や後架へと通じてゐる。

さて照明が入れば、六人の顔は防毒面で隠されてはゐるものの、その服装から男四人、女二人であることがわかる。動きに乏しかつた二人のうち、上手際前面（机と椅子）で動かなくなつたのは新調の国民服に黒い革鞄の、短髪の男（憲兵伍長権藤三郎）で、彼は当分の間、防毒面を脱ぐことはないだらう。銅像か何かのやうに凝としてゐる。もう一人、いましがた「中央やや下手寄りでスーツと沈んで止ま」つてしまつたのは府立第一高等女学校（浅草七軒町）の制服の小笠原みさを。卓袱台の横に座つて面をやや伏せてゐる。髪型は控へ目の内巻き。

スイッチをひねつたのは小笠原ふじ、婦人国民服にロール巻きの髪型。ふじは一番に防毒面を外しながら卓袱台の真ン前に座る。

ふじ　お疲れさまでしたわね。浅草区の防空訓練はさつきの「●●●」、「●●●」の半鐘の合図でおしまひ。●●●は、空襲警報解除の合図なんですからね。

帳場と茶の間との境ひのあたりで、カーディガンとくたびれた背広が、たがひに亡霊か骸骨人間にでもなつたつもりで脅しツこをしてゐる。カーディガンはオデオン堂主人の小笠原信吉。背広は広告文案家の竹田慶介。ピアノの前で二人の動きに合せて学生服が漫画映画などのコワーイ場面に楽士がよくつける紋切型の伴奏を叩く。学生服は森本忠夫。オデオン堂に住み込みのピアノ弾き、かたはら夜は明治大学専門部へ通ふ苦学生。
ふじ、茶簞笥からお鉢を出して、卓袱台の上に音をさせて置く。

ふじ　いつまでも遊んでゐると炒り豆を食べ損つてしまひますよ。

途端に信吉は卓袱台の前に座り込んで防毒面を脱ぐ。ふじは陶製の薬缶を火鉢からおろして火をかきおこし、また薬缶をかけて茶の支度。竹田は外した防毒面を下げて縁先に出ると、空を見あげる。この夜、東京は晴れ。月齢は四日。月はすでに落ちてしまつてゐる。

ふじ　竹田さん、森本くん、お茶が入りますよ。

森本は茶を受け取り豆をすこしつまんでピアノの前に戻る。彼は特別のことが起らない限りピアノの前を離れようとしない青年なのである。竹田は縁から乗り出すやうにして（正確には七十八度、ほとんど天頂に近い）夜空を見上げてゐた。

竹田　ペガサスがちやうど真南（まみなみ）（＝観客席正面）にかかつてゐますな。今日は昭和十五年十一月三日。明治節。十一月はじめの、東京の夜空の真南にペガサスがかかると、時刻はちやうど午後八時です。

符丁を合せたやうに掛時計（神棚の隣）が鳴りはじめる。その音を聞き、茶の間の電灯で腕時計の針をたしかめて竹田は満足さうに頷き、信吉の横に座る。

信吉　ペガサス……。（ふじに）「花咲き花散る宵も」がはやつたのはいつだつたつけ。

ふじ　四年前の昭和十一年。

信吉　その年にペガサスレコードといふ会社ができてね、レーベルに馬の絵が描いてあつ

た。

竹田　ペガサスとは天駆(あまか)ける馬のことですから馬が描いてあるのは当然でせうな。ギリシャ神話に出てくる翼の生えた馬。こいつは高く勢ひよく飛ぶんです。

信吉　レコードの方はさつぱりだつた。「ああそれなのにそれなのに」……（ふじに）ねえ、これは何年だつたつけ。

ふじ　同じ年よ。

信吉　さう、一年保(も)たずに潰(つぶ)れちまつた。

竹田　そこへいくと本家のペガサスはまことに景気がいい。たとへばあるときペガサスが勢ひ余つて岩を蹴つた。すると真ッ二つに岩が割れてそこから泉が湧き出したと云ふんですが、この泉の水がすごい。

信吉　お酒に変るんでせう。

竹田　詩人の魂を高めてくれるんです。この泉の水を飲むと、立派なコトバや美しい考へがそれこそ泉のやうにひとりでに湧いてくると云ひます。一ト口でいいからそのペガサスの泉の水にありつくことができたら、と思ひますよ。さうしたらぼくも、もうすこしマシな広告文が書けるかもしれない……。

信吉　慶介さんの広告文は立派なものですよ。ほら、いつだつたかの、心臓薬「救心」の広告文。新聞で読んで思はずドキツとしちやつた。（ふじに）なんだつたつけ。

ふじ　「心臓と空襲に待つたなし　救心」でしよ。

信吉　味の素の広告文も傑作だつた。えーと（トふじを見る）……

ふじ　「焼いて喰はうが、煮て喰はうが、いつも味の素」

竹田　どちらも去年の仕事です。どうも今年はもうひとつ冴えませんでしたなあ。

信吉　いやいや、今年のにもいいのがありました。（これはどういふ訳か憶えてゐて）「脂も留まらぬスモカの早技。タバコのみの歯磨スモカ」

竹田　ぼくのはライオン歯磨です。

信吉　さうでしたつけ……

竹田　「からだは黒く、歯は白く。夏に鍛へよう、ライオン歯磨」

信吉　さうか、さうでしたな。でも、慶介さんのもなかなか口調がよろしいよ。

竹田　スモカとはくらべものにならない。向ふが星ならこつちのはただの石ころですよ。

すこし前からふじはみさをの様子を気にしてゐた。みさをの肩先が細かく震へてゐるばか

りではなく、上下に鋭く動いてもゐるのである。

ふじ　……みさをさん。ねえ、どうしたの。

信吉　防毒面が珍しいんだろ、だからさうやつていつまでも遊んでゐるんだろ。

ふじ　みさをさんは高等女学校の最上級生よ。お面かぶつてうれしがる年齢ぢやないわ。（みさをに向ひ強くかつやさしく）なぜ泣いてゐるの。みさをさん、あなた、なにが悲しいの。

みさをは防毒面を外す。ふじが見抜いたやうに目に涙をためてゐる。ふじ、気をきかせて手拭を手渡す。

みさを　ありがたう、かあさん。……でも、かあさん、どうしてわたしのことをいつまでも子ども扱ひなさるの。とうさん、どうして正一兄さんのことをわたしに隠すの。（妻い勢ひで豆を摑む）これはくやし涙なの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong